

論文の要旨

論文題目 日本語存在・所有表現の認知言語学的研究
氏名 大西 美穂
学位 博士（文学）
授与年月日 平成24年3月26日

本研究は、認知言語学研究の一環として、現代日本語の存在表現を考察、研究するものである。日本語存在表現には、「机の上にバナナがある」のように、ある場所に存在物を位置付けたり、「お化けなんて本当はいない」のように、場所への位置付けとは関係なく、ある物の存在の有無を述べたり、また、「太郎には財産がある」のように、ある所有者に関連付けられる所有物が存在することを述べたりするものがある。日本語存在表現には数多くの研究があるが、認知言語学の立場から体系的な考察をしている研究は少なく、存在表現のうち所有文のみを考察対象としているなど個別の現象の分析にとどまるものが多かった。また、存在表現の用法の広がりや認知能力との関係に関しては、いくつかの異なった見解が示されている。本研究においては、存在表現の研究は個別の用法の記述だけでなく体系的な考察を要する性質のものであると考え、存在表現の包括的な分類を提示し、各タイプの特徴を記述することを第1の目的とした。その際に、認知言語学の観点から考察を加えた。さらに、この分類を基盤に、複文の存在文や英語所有文の個別の現象を分析することを第2の目的とした。

本研究の主張は、以下のようにまとめられる。日本語存在表現は、場所、存在、所有の概念領域を中心とする複数の概念を表示できる表現であるが、用法の広がりや動機付ける要因のひとつは、人間が外界の存在物を認識する方策として用いる認知能力である。存在の認識の方策には、抽象化の能力による抽象と具象の関係や、統合的な全体の認知に伴う全体・部分の関係、カテゴリーの上位と下位の関係、ある場所とそこに位置づけられる物との空間的な関係などがあり、いずれの関係も非対称的で、依存的な一方が自律的な他方に依拠して認識されるという階層的な様式を持つ。我々人間の、外界の存在物に対するこのような認識スタイルは言語に反映され、場所存在文、絶対存在文、所有文を中心とする多様な存在表現として顕在化する。見方を反転させれば、存在表現という共通の言語的表象を持つ場所、存在、所有を中心とする複数の概念は、相互に近い関係にあると想定できる。この想定のもと、本研究では階層を成す概念の各タイプと存在表現の個々の用法との対応を論じ、この議論から存在表現の体系的な分類ができることを示した。本研究ではさらに、複文の存在文や所有文、あるいは談話標識化した存在文や所有文が、より基本的な存在文や所有文の文構造をどのように利用しているかに注目し、これらを分析した。

本研究は、序論、本論、結論で構成される。まず、序論において上述のような研究の目

的を明らかにし、考察対象である存在表現の暫定的定義と考察方法を示した。

本論の第 1 章では、本研究における存在表現の分類を提示するための基盤となる先行研究を整理した。まず、日本語存在表現の大きな括弧を類型化し、それぞれの特徴を記述している先行研究を取り上げ、考察を加えた。次に、日英語対照や類型論的基盤を持つ存在文、所有文、場所文などの相互関係に関する先行研究を取り上げた。これらの先行研究から、日本語存在表現が、大きな 2 種類に大別されることを見た。さらに、「責任がある」を「責任を持つ」とも表現できることから、「持つ」のような類義表現との使い分けに関する先行研究も取り上げ、存在表現の拡張の範囲を確認した。最後に、これらの先行研究を整理し、本研究の課題を整理した。主な課題として、存在表現のうちでも、所有文の文構造については意見の一致が完全にはなされていないことを指摘し、問題を絞り込んだ。

第 2 章では、認知言語学の理論のうち本研究が基盤とするものを示し、本研究の対象となる存在表現に関して何を説明できるのかを述べた。まず、カテゴリー化を始め、認知言語学の基盤となる知識体系の概念的階層構造を取り上げた。次に、言語の構造化に関与する認知の主体の能力や、談話現場において談話参加者がこうした能力をどのように発現するかを示した。

第 3 章では、本研究における存在表現の分類を提示した。分類は、従来から主張されているとおり、二種類に大別された。ただし、後述するような構造的な違いもあるため所有文については別分類を設けた。以上を (A) 空間関係の存在表現、(B) 存在の有無を述べる存在表現、(B') 所有関係の存在表現と呼び、さらに各存在表現の特徴を示した。次に、(A)、(B)、(B') の、それぞれの基本的構造を (A) "Y is located at X"、(B) "Y exists"、(B') "As for X, Y exists" のように提案した。(A) は、存在前提を持つ存在物を特定の場所や時間に位置付けたり、この存在前提を取り消したり、また存在物の発見を述べたりする存在表現である。このため、場所句が必須である。(B) と (B') は、存在前提を持たない存在物が存在することを言明する存在表現、および、談話に聞き手の知らない存在を導入する存在表現である。このうち (B) の、存在の有無を述べる存在表現の存在動詞は、場所句を必須としない一項存在動詞である。(B') の所有関係の存在文は、存在を言明する点でも、動詞が一項存在動詞である点でも (B) と同じ分類として一般化されるが、この所有物名詞の他に、文レベルで所有者名詞を必須とすることから、この構造的な違いを示すために別の分類とした。

第 3 章の存在表現の分類を基盤に、第 4 章から第 6 章では複文の存在文を分析した。第 4 章では「こと」で名詞化される節が存在動詞「ある」の項に生じる埋め込み構造を持つ存在文を 2 種類取り上げ比較した。このような存在文は「ことがある」という複合的な表現として研究されることが多く、存在文の一種という見方がこれまで少なかったが、存在文として考察することで、改めて以下のことが明らかになった。1 つ目の構文は「経験・蓋然性を表す存在文」で、(B') の所有文の基本的構造を持つ。2 つ目の構文は「原因・理由を表す存在文」で、(B) に属するリスト存在文である。このように、単文の存在表現のパターンを持ちながら、複文の存在文で記述された存在動詞「ある」の意味は、複文における独自の

意味であり、高次レベルに生じる創発的な意味であることも指摘した。

第 5 章では、話者が記憶内容を聞き手に対して提示する際のマーカーとなる「ことがある」のタイプの存在表現を取り上げ考察した。「いつだったか」、「あるとき」のような時間表現が生じやすいという特徴が「経験」を表す「ことがある」とは異なっていた。このタイプの表現を便宜的に「回想」と呼び、これを、(B)に属する初出導入文の構造を持つ存在文であることを論じた。

第 6 章では、「父のことがある」のような「[名詞]のことがある」という形式を持つ存在文を取り上げた。このうち、「こと」が「名詞節」を作る名詞化辞のように働き、単文というより複文のように解釈される場合を主に論じた。

第 7 章では、近年急速に定着が進む表現である「イチゴが売っている」、「再放送がやっている」などの、他動詞であるが自動詞構文を構成する「売る」、「やる」について考察した。ここで生じている文法現象は他動詞から自動詞への派生や自他の交代現象ではなく、存在表現の拡張的用法であることを提案した。また、「売る」や「やる」に起こっている自動詞用法という波が、日本語全体の文法構造の基本的な変化である可能性を示唆する先行研究に対し、これらの変化はこれらの用法の必要性からそれぞれ個別に生じているものであるという考えを論じた。

第 8 章から第 9 章では、英語所有文を取り上げ、日本語存在表現との対照研究を行った。第 8 章では、先行研究で項構造の逸脱であるとされてきた“The desk has a map on it”のような前置詞句を伴う所有文を取り上げ、他動詞文である英語所有文における他動性の希薄化による多義化の現象と、この希薄化に伴う文構造の変化を論じた。また、自動詞文である日本語の所有文と当該の英語所有文が、ともに談話のトピック階層を作る機能を持つことを示し、両者の共通点が参照点能力にあることを論じた。

第 9 章では、英語所有文に名詞のレベルで存在を前提とする所有物が生じる場合と、そうではなく所有文の文レベルで所有物の存在が言明される場合とに分け、定性効果と呼ばれる所有文の制約（定の目的語を許さない制約）の一端を説明した。

次に、本研究の意義を 3 点示す。本研究の 1 つめの意義は、存在表現の妥当な分類と特徴づけに認知言語学の知見を活かし、従来の分類に改訂を加えたことである。例えば、全体-部分関係の認知や階層概念が所有文の分類に有効であるということを示した。また、先行研究において意見の一致がなかった絶対存在文と部分集合文の特徴を再検討し、絶対存在文という大分類の中に、部分集合と絶対存在を同時に述べるタイプと、カテゴリー化関係と絶対存在を同時に述べるタイプの 2 つのタイプがあることを指摘した。さらに、これまで 2 つに大別されていた存在表現の分類を踏襲しながら、所有文に別分類を設けることを提案した。そして、このそれぞれに基本的な文構造をスキーマの形で規定した。2 つめの意義は、認知文法の文法観に立ち、形式と意味の組み合わせ、言語使用と意味の連続性という観点から、言語学において統語論、意味論、語用論として峻別されやすい各分野の相互の関係を論じたことである。文の構造を決める要因は動詞に内在的な項構造だけではな

く、構文単位の慣習的な構造や、情報構造である場合もある。このような機能的な文法観の妥当性を、存在文と所有文の構造を議論する中で示した。例えば存在述語が1項動詞か2項動詞かを規定したが、それだけで文構造を説明することはできず、所有文のトピック-コメント構造や、存在文が構文スキーマとして働く場合などを論じた。3つめの意義は、従来「ことがある」の単位でその文法的機能が記述されるだけであった複文の存在文について、標準的な存在文の中に位置づける分析を行ったことである。これによって、これまでアスペクト表現として記述されるだけであった「ことがある」に対し、〈原因・理由〉を提示する機能や、〈回想〉を表す機能があることが明らかになった。

本研究で残された課題を2点述べる。本研究では、特に肯定の存在表現を中心に分類を行った。しかし、存在表現の肯定文と否定文は分類において対応を見せない場合があり、それは先行研究でも部分的には指摘がされてきた。本研究においても、遺失・生死文のような否定文専用の分類を設け、また否定をテストに用いた分析を示した。しかし、否定の存在文の体系的な分類や分析は課題として残った。もうひとつの課題は、より多くの存在表現の実例を分析するということである。第4章以降で実例をデータに複合的な構造を持つ存在表現を分析したが、他にも分析すべき複雑な構造を持つ存在文や所有文があり、本研究で扱ったものだけでは網羅的とは言えない。また、口頭の談話資料を用いた研究が不足しており、この点については今後の課題となった。

最後に、本研究の展望を示す。第8章から9章で日英対照を行ったが、日本語存在表現の分類を援用した他言語の分析は有望な課題であろう。これまで英語所有文との対照がされてきた分野で、所有文ではなく存在文を基盤とした分析がなされれば、研究に新たな観点を提供するのではないかと考える。